

白き山茶花

瀧澤 徹

亡き父母の御霊は今も坐すらむ解体を待つこの家内に  
幼なかりし弟妹の影偲びつつ寒椿活け部屋を巡りぬ  
若くして末の妹逝きし日も白き山茶花かく咲きてるし

妹を偲ぶ縁よすがに新しき庭に移さむ白き山茶花

山口より名島の丘に移り住みうから八人健やかなりき

朝鮮に戦ひありて朝な夕な板付基地の米軍機飛ぶ

いさかひてはまた和みつつ四軒で古井戸ひとつの水を分けあふ

竹林のいつしか家を取り囲み太き竹の子床の間に出づ

貧しき父母ガス水道の無き家に我ら五人を育みくれし

祖母に父母比佐子正紹すでに逝き残る三人は白髪になりぬ

掘られたる孟宗の根の乾きをり家の失せたる丘の更地に

おばさんに行き先告げて切符買ふ故郷の駅「西鉄名島」

名島の丘の我が家を解体するにあたりて詠める。

二〇〇五年 嚴冬

所沢市在住の妹 美佐保が自分か作ると  
うみこみ紙に書いたもののみ

(注) 名島の家Ⅱ現住所・福岡市東区名島4-24-10

元寇で有名な多々良川を見下ろす高台にある私の実家。父が山口高商から九州大学文学部に転勤したことに伴い、昭和23年夏、ここに転居。私はここで小・中・高校時代を過ごした。母は父の死後86才の秋に倒れるまで一人でここで暮らしていた。KenやRyuが幼い頃の名島の家は、民話「ふるやのもり」が思い起こされるような古びたボロ家であったが、鬱蒼とした竹林に囲まれ、植木屋を一度も入れたことがない高低のある庭には、木イチゴ、枇杷、いちじく、山桃などが実っていた。家の周辺は、西鉄が大規模な宅地造成にかかるまで、林、森、丘に囲まれ、冬休みに私達が帰省したときKenはいつも家の裏の低い灌木の中で「みそんちゅう」と呼ばれる甘酸っぱい木の実を、口を紫に染めながら摘んで食べることに熱中していた。雨が降ると赤土でぬかるんだ家までの坂道も、今は舗装され、西鉄が売り出した80〜100坪単位の立派な住宅が並び立ち、名島の家だけがひっそりと時代の変化をまるで知らぬかのように無人で静まり返っている。KenやRyu、また他の甥や姪もこの家には人の心を安らわせる靈気が漂っているという。母の死後、長く無人であったこの家も、50年という歳月を関西で暮らしてきた長兄夫婦が建て替えて移り住むという計画がようやく発進し、来年の秋にはそこに新しい家が建つはずである。

この「ふるやのもり」が消え去るのは、Kenでなくても皆（長兄夫婦も含めて）とても寂しく思っているが、築70年近いこの家は、人が住むにはあまりに不便で、また壊れかけているところもあり、建て直すことはやむをえない。そこを売るのはなく、父母が誰より信頼していた長兄夫婦がまたそこに住んでくれることには心からの感謝である。きつと父母も喜ぶと思う。父母が長く住み、孫達の憩いの場であった名島の家と風景は、それぞれの心の中にしっかりと焼き付けられて残っていくことだろう。



名島を家の玄関付近